

**幼稚園教諭・保育士合同研修会（9月26日池上会館にて）**

第4回となる研修会の講師は、東京家政大学子ども支援学部子ども支援学科教授、岩立京子先生をお迎えして行われました。テーマは“子どもの主体性を育む保育—環境を通した保育の実践—” 109名の参加がありました。

今日の世界は“VUCA”な時代（Volatility 激動・Uncertainty 不確実性・Complexity 複雑性・Ambiguity 曖昧性）といわれ、先の見えない複雑な社会では正解が見えにくくなっています。コロナ禍、ウクライナ問題、紛争、科学技術・高速通信ネットワークの進展、AIの開発において、子どもたちが未来をたくましく生きるための力として“主体性を育む必要性”が強く求められています。しかしそれは、子どもに高度な知識を教えることや、子どもに何かをさせて大人が満足することではありません。子どもの主体性を育むためには、“非認知能力”が不可欠であり、保育現場では保護者に説得できる内容であることが求められています。保育はただ遊んでいるのではなく、どのように非認知能力を育てているのか、そしていかに“環境構成”が大事なのかということを知ってもらいたいとお話されました。

**↓環境構成とは？（保育所保育指針より）**

子どもが自発的・意欲的に関わられるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること。乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育することである。

**↓環境を通した教育・保育とは？**

子どもがやってみたいと思えるような物的・人的環境構成をする。一人一人の子どもが興味・関心に応じて選択できる内容、遊び込める時間、空間からなるものや試行錯誤や挑戦が生まれる環境の構成をする。子ども自身が発展していくための援助（イメージを広げるために話を聞く）をすることが大切である。

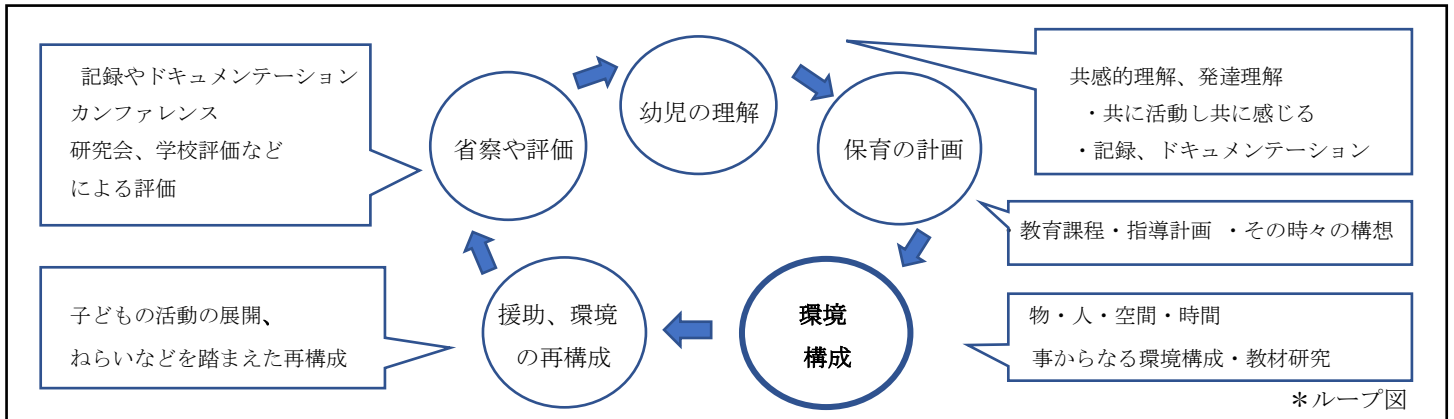
**↓援助、指導で大事なことは？**



AとBの共通部分をどう実現するかが難しく、専門性を必要とする。行き当たりばったりでも駄目だし、保育者の意図通りに引っ張ってばかりでも駄目である。やりたくなるような環境を作る。子どもの思いを理解しながら援助する。例えば、自由遊びから「やってみたい」を引き出す。子どもにとっての楽しさ、動きを予測しながら環境を構成する。

**↓質の高い環境構成はどこから生まれるのか**

\*AとBの重なる部分を「保育のねらい・内容」とする



**↓最後に岩立先生から研修者へ（\*ループ図を見ながら）**

保育の仕事をする皆さんは、“トータルコーディネーター”です。保育者は多様な役割をしていく必要があります。保育室内の環境図を書き、子どものこれまでの遊びを記入し、次週の遊びを予想していきましょう。そこに願いを重ね合わせて週案を書き、全体像を捉えながら環境を構成してみると“見える化で共有”できるでしょう。保護者にも理解してもらえらると思います。

最後に、保育の全体計画を“グランドデザイン”として教育計画を立てる。その中で役割を分担していくことが大事（園務分掌）。若い先生でも、先輩に倣って保育していくと自信になる。援助してもらいながら引き継いでいきましょうとお話されました。

**感想** ・月、週案を立てる際、活動ありきになっていたと反省した。まずは子どもありき、その姿からねらいが見つかり、環境は存在するものではなく工夫して作っていくものだ理解することができた。「保育者による仕掛け」という言葉が印象に残った。明日からの保育で実践していきたい。 ・子どもたちの「やりたい」気持ちを尊重した保育ができていないか考えさせられた。「これやってもいい？」と聞く子どもが多くいて自発的に行動する機会や意欲を失くしてしまっているのではないかと思った。子どもを見て環境設定をして「自由な発想」を受け止め、学んでいける保育を意識していきたい。 ・実際の指導計画や子どもの活動の写真がありとても分かり易かった。